

現代語研究、村上春樹『海辺のカフカ』

〔新潮社二〇〇二年九月刊〕上・下二冊

萩原 義雄

「…っぽい」表現

- カラスと呼ばれる少年は皮肉っぽく、唇を軽く曲げてあたりを見まわす。〔上巻 4 ③〕
- そこにある子供っぽさみたいなものが相手を安心させる。〔上巻 33 ⑩〕
- ラインカーネションというか、ちよつとニューエージっぽいところはあるけどもね。〔上巻 55 ③〕
- ニューエージっぽい子だし、なにしろ行き先がインドだから、本当に1カ月で帰ってく…るのかどうかあやしいものだけど。〔上巻 125 ⑪〕
- なるべく大人っぽいしゃべりかたをする。〔上巻 160 ⑫〕
- ギリシャ神話の神様たちは、宗教的というよりはむしろ神話的なんだ。つまり彼らは人間と同じような精神的な欠陥を持っている。癩癩持ちだったり、好色だったり、嫉妬深かったり、忘れぼかりりする。〔上巻 267 ①〕
- 整った顔だちや、現実離れをした妖精っぽさは今でもそこにある。〔上巻 385 ②〕
- 光は古めかしく、粉っぽい。〔下巻 344 ⑥〕

比喩表現「…みたいに」

- キウウリはゴムみたいになっている。〔上巻 161 ⑦〕
- 私たちはしばらくその場に凍りついたみたいになっていました。〔上巻 172 ⑫〕
- 「空から雨が降るみたいに魚が降ってきました。たくさん魚です。たぶんイワシだと思えます。中にはアジも少しは混じっているかもしれません」〔上巻 291 ①〕
- 少女はその心の森の中にだまし絵みたいに潜み、こっそり眠っている。〔下巻 34 ⑯〕
- 時間に関して何かの異変が起こっているのだ。そのせいで現実と夢が混じりあってしまったのだ。海の水と河の水が混じり合うみたいに。〔下巻 89 ⑱〕
- そこに見えるものは映画撮影用の背景画みたいにぴくりとも動かない。〔下巻 109 ①〕
- ビルの上に浮かんだ雲は、長いあいだ取り出されなかった真空掃除機のほこりの硬い塊みたいに見えるた。
- 「まあいいや。で、そのあとナカタさんは冬眠に入ったみたいにかんこんと眠り込んでいるわけさ。石はまだここにある。そろそろ神社に返した方がいいんじゃないかな。勝手に持ち出して、祟りが心配だ」〔下巻 193 ⑥〕
- お前は春先の猫みたいに落ちつきがないって、じいちゃんにも言われたもんだ。〔下巻 354 ②〕

比喩表現「…ように」

- いいえ。瞳がまるで探照灯のように左右に動く以外に、変わったところは何もありませんでした。〔上巻 48 ②〕

- 子どもたちの顔には表情がなく、それは青銅でできた仮面のように見えました。「上巻172⑬」
- 亀かめのような甲羅こうらもありませんし、鳥のような翼よくもあります。もぐらのように土の中にもぐれませんが、カメレオンのように色を変えられるわけでもありません。「上巻139⑩」
- まるでなにかの魂を抜きとるときのような音だ。「上巻194⑧」
- 車のライトが樹木の太い幹を、ひとつひとつなめるように照らしだしていく。「上巻196⑤」
- 真っ赤な舌が、歯のあいだから炎のようににちらちらと見える。「上巻210⑨」
- 鳥たちの声があたりにシャワーのように勢いきほよく降り注いでいる。「上巻224⑬」
- 冷やかなすきま風が吹きこんだときのように肌がさつと粟あわだつ。「上巻231①」
- 暗い色あいのなにかが、まるでだまし絵だましゑの中の動物のように樹木のあいだに姿をひそめ、僕の行動を観察している。「上巻235⑨」
- 大きな硬い雨粒が小石のように全身を打つ。「上巻236⑭」
- そこには数えきれないくらいにたくさん巨大なトラックが動物のように肩を並べ、身を休めている。「上巻330⑩」
- 彼女はそのような幸福な偶然の出会いから醸かもしだされてきた妖精スピリットのように見える。「上巻384⑧」
- 永遠に傷つくはずのないナイーブでイノセントな想いが、彼女のまわりに春の胞子ほうしのように浮かんで漂ただよっている。
- でもその声は庭の踏み石を濡ぬらす春の雨のように、僕らの意識を柔らかく洗う。「上巻394⑥」
- 大きな船が舵かじを切るときのように、身体がゆっくり角度を変える。「下巻89⑪」
- 彼女は静かな微笑みを、明け方の白い月のように口もとに浮かべる。「下巻110⑦」
- 松林をときおり風が抜け、たくさんの人がほうきで地面を掃はいているような音をたてる。「下巻122⑮」
- 太鼓の上で不精なこびとが足摺あしずりをしているような感じの、あまりぱつとしない雷鳴かみなりだった。でも雨粒はあつと言う間に大きくなり、土砂降りになった。世界はむっとする雨の匂いに包まれた。「下巻134⑩」
- 頭の中で柔らかな泥どろのようなものがぐるぐると渦を巻いた。「下巻147⑥」
- 巨大な暗黒の雷雲は緩慢かんまんな速度で市内を横断し、まるで失われた道義を隅々まで糺ただすかのようにに、落とせるだけの稲妻を矢継ぎ早に落としたが、やがては東の空から届くかすかな怒りの残響へと減衰していった。「下巻162②」
- 「耳を澄ませればいいんだ、田村カフカくん」と大島さんは言う、「耳を澄ませるんだ。はまぐりのように注意深く」。「下巻190⑮」
- 二人は砂浜に並んで座って、長いあいだ何も言わずに、小さな波が、まるでシートを持ち上げるのようにに上がり、小さな音を立てて崩れるのを眺めていた。「下巻206③」
- 太陽の光が僕をフィルムフィルムのようにに包み、温めてくれる。しかし帰り道で感じた恐怖の感覚は、庭の隅に溶け残った雪ゆきのようにに、長いあいだ僕の身体に残っている。「下巻246⑯⑰」
- 大きな黒い蚊がときどき、まるで偵察者のようににやってくる。「下巻278⑤」
- 暗い雲が切れると、ハナミズキの葉が月の光を受けて千の刃物やぶのようにに光る。「下巻283⑱」
- 頭の動きがそろそろスピードをゆるめ、列車が駅に停まるときのようにに停止し、やがてまともにものを考えることができなくなってしまう。「下巻343⑬」
- 「なにしろ石のようにに非情ひじやうっていう表現があるくらいのもだ」。「下巻353⑭」
- 少女の二本の腕が朝の光の中で陶器たうきのようにに輝く。「下巻389⑥」

象徴語表現

- そしてまた鉛筆を手に取り、お尻についた消しゴムで机をとんとんと叩く。「上巻 62 ⑰」
- ちくちくする灌木の枝に頭をもたせかけたまま、息を吸いこんでみる。「上巻 116 ③」
- 猫は目を細め、喉をごろごろと鳴らし始める。「上巻 163 ⑧」
- 表面はつるつるとして、湿っています。「上巻 169 ⑩」
- 胸がどきどきして、息が詰まりました。「上巻 170 ④」
- 大きな車を追い抜くと、ひゅつという空気うなりが聞こえる。「上巻 194 ⑦」
- 冷却ファンがまわり、酷使され熱を持ったエンジンが外気にさらされて、しゅんしゅんと音をたてている。「上巻 197 ⑦」
- 真つ赤な舌が、歯のあいだから炎のようにちらちらと見える。「上巻 210 ⑨」
- 犬と同じように真つ黒で、ぴかぴかだしみひとつない。「上巻 214 ④」
- 顔は妙につるつるして、髭ははえていない。「上巻 216 ⑤」
- ときおりポーチの床がみしりと不吉に軋む。「上巻 223 ④」
- フクロウが夜の言葉を宙に浮かべ、遠くのほうでなにかが地面に落ちるようなどすんという音が聞こえても、部屋の中でなにかが動く気配があっても、目を開けない。「上巻 224 ⑤」
- 多くの魚は地面にぶつかるときに潰れてしまったが、中にはまだ生きているのもいて、商店街の路面をぴちぴちとはねまわっていた。「上巻 251 ⑩」
- 商店街の道路にはイワシとアジの鱗がこびりついて、いくらホースで水を流してもうまくとれなかった。しばらくのあいだ路面はぬるぬるとして、自転車の車輪を滑らせて転ぶ主婦も何人かいた。
- 「上巻 294 ④」
- 「そういう犬がうようよいるんだ、この世界には。走狗っていうんだけどな」「上巻 327 ⑰」
- ナカタさんがこうもり傘の先でアスファルトをこつこつと叩きながら駐車を歩いた。「上巻 330 ⑨」
- ナカタさんがこうもり傘の先でアスファルトをこんこんと叩きながら近づいていくと、男たちの何人かが振り向いて鋭い目を見た。「上巻 331 ⑨」
- 地面に倒れた男が身体をもそもそと動かし、頭を丸刈りにした男が重い作業服でその脇腹を思い切り蹴り上げた。「上巻 332 ⑤」
- 「ずいぶんぬるぬるしてやがる。しかしまあ、ヒルって気味悪いもんだよな。なあ、おじさん、ヒルに張りつかれたことあるか?」「上巻 335 ⑥」
- 「これが関西の卵焼きなんだ。東京で出るみたいだな、あの座布団みたいなかすかすのものは、出来が違うんだ」「上巻 361 ⑮」
- 魔法瓶からお茶を出して飲んでいるときに、ばらばらと雨が降りだし、ナカタさんは大事にもっていた傘をさした。「上巻 372 ⑫」
- それから青年はようやく息を吸い込み、肘をついてよろよろと身を起こした。畳が嵐の前の海のようにゆらゆらと不吉に揺れていた。「下巻 14 ⑦⑧」
- 小ぶりなハンマーが僕の頭の中で引き出しのどれかをこつこつと叩いている。「下巻 37 ⑥」
- 佐伯さんは手に持っていたコーヒーカーップをソーサーに戻す。かたんといいともも中立的な音がする。「下巻 111 ⑦」
- やがて遠くに鈍い雷鳴が聞こえ、それを合図として雨がぼつぼつと降り出した。「下巻 134 ⑩」

- 空気が震え、ゆるくなった窓ガラスがかたかたという神経質な音を立てた。〔下巻 138 ⑮〕
- 激しい音が出し抜けに空気を引き裂いた。どこか近くに雷が落ちたみたいだった。星野さんの鼓膜はびりびりと痛んだ。〔下巻 141 ⑭〕
- 石を支えたまま大きく息を吐くと、全身がみしみしと痛んだ。〔下巻 146 ⑬〕
- 頭の中で柔らかな泥のようなものがぐるぐると渦を巻いた。〔下巻 147 ⑥〕
- ナカタさんはまだ隣でこんこんと眠っている。〔下巻 192 ④〕
- だからホシノちゃんのケータイをりんりんと鳴らすことくらいお茶の子さいさい、朝飯前だ。〔下巻 192 ⑭〕
- 「まあいいや。で、そのあとナカタさんは冬眠に入ったみたいにかんこんと眠り込んでいるわけさ。石はまだここにある。そろそろ神社に返した方がいいんじゃないかな。勝手に持ち出して、祟りが心配だ」〔下巻 193 ⑥〕
- ナカタさんはやってきて、リスのようにくんくんと匂いをかいだ。〔下巻 204 ⑬〕
- 手のひらくらいの大きさの真っ黒な蝶が、ひらひらと僕の視界を横切っていく。〔下巻 246 ②〕
- ふと思いだしたようにときどき現実の風が吹いて、暗い色あいの葉が足もとでさわさわと不穏な音をたてる。〔下巻 246 ⑨〕

慣用句表現

- 「旅は道連れ、のあと。なにか続きがあったわよね？ 思い出せない。私はコクゴが昔から弱いので「世は情け」と僕は言う。「旅は道連れ、世は情け」と彼女は確認するように繰り返す。〔上巻 37 ⑰〕
- 光陰矢のごとし、月日の巡るのはまことに早いものです。〔上巻 165 ⑪〕
- 「うん。聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥、てのが俺のじいちゃんの口癖だったね」〔下巻 44 ⑩〕
- だからホシノちゃんのケータイをりんりんと鳴らすことくらいお茶の子さいさい、朝飯前だ。〔下巻 192 ⑭〕
- 「賢明な結論だ。『下手な長考、休むに似たり』という言葉がある」〔下巻 193 ⑱〕
- 「下手な長考、休むに似たり、か」と青年は腕組みをして言った。〔下巻 204 ⑤〕
- 「でもさ、おじさん、世の中には『毒くわば皿まで』って言葉がある」〔下巻 209 ⑱〕

並列句表現

- 新しい様式、新しい知識、新しい技術、新しい言葉……。〔上巻 167 ⑮〕
- 野菜と果物、クラッカー、牛乳とミネラル・ウォーター、缶詰、パン、レトルト食品、ほとんど調理の必要のない、簡単に食べられるものばかりだ。〔上巻 195 ⑥〕
- 夕食の前に僕は運動する。腕立て伏せ、シットアップ、スクワット、逆立ち、何種類かのストレッチ——機械や設備のない狭い場所で、身体機能を維持するためにつくられたワークアウトメニューだ。〔上巻 232 ⑨〕
- それは僕の頬を打ち、^{また}瞼を打ち、胸を打ち、腹を打ち、ペニスを打ち、^{こうが}睨丸を打ち、背中を打ち、足を打ち、尻を打つ。〔上巻 236 ⑮〕
- 音楽にかわるものはいたるところにあった。鳥のさえずり、様々な虫の声、小川のせせらぎ、樹木の葉が風に揺れる音、なにものかが小屋の屋根を歩いている足音、雨降り。そしてときどき耳に届く、

説明のつかない、言葉では表現することもできない音……。〔上巻 261①〕

○たくさんのお茶を飲み、ポーチの椅子に座って讀書に集中する。日が暮れるとストーブの前で本を読む。歴史書を読み、科学書を読み、民俗学や神話学や社会学や心理学の本を読み、シエクスピアを読む。一冊の本を最初から最後まで読みとおすよりは、重要だと思える部分を、理解できるまで何度もいいに読みかえすところがある。〔上巻 262⑤〕

○家具、食器、雑誌、衣服、絵画……。いくらかでも価値のあるものもあれば、ほとんど無価値としか思えないものも（むしろそっちのほうがずっと多いのだが）ある。〔上巻 379⑱〕

○僕はベッドを出て、窓際に行って夜の空を見あげる。そして戻ることのない時間について思う。川について思い、潮について思う。森について思い、わき出る水について思う。雨について思い、雷について思う。岩について思う。影について思う。それらはみんな僕の中にある。〔下巻 60⑨〕

○ホシノちゃん、この子はきつと気に入ると思うね。うちの掛け値なしのナンバーワンだ。おっぱいむちむち、肌はつるつる、腰はくねくね、あそこはぐしよぐしよ、ばりんばりんのセックス・マシンだ。車にたとえるならば、まさにベッドの四輪駆動、踏み込めば愛欲のターボ、指が包むは怒濤のシフトノブ、さあコーナーだ、とろけるギアチェンジ、よしきた追い越し車線まっしぐら、行くぞ、行くぞ、ホシノちゃん見事に大昇天だ。〔下巻 76①〕

○「よう、ナカタさん。よう、おじさん。火事だよ。洪水だよ。地震だよ。革命だよ。ゴジラがきたよ。しつかり起きてくれよ。頼むよ」〔下巻 198⑫〕

○「だつてさ、あのへんにもしセブンイレブンがあつて、あのへんに西友ストアがあつて、あのへんにパチンコ屋があつて、あのへんに吉川質店の広告板があつたら、そんなに安らかな気持ちにはなれないじゃねえかな。見渡す限りなんにもないってのはいいもんだ」〔下巻 206⑪〕

言語遊技の表現 「しりとり」

○「なるほど、なるへそ、へそのゴマ、ゴマをまぶしてタヌキ汁、ときたね。まったく心強いことだ」〔下巻 145⑬〕

言語遊技の表現 「早口ことば」

○『ヒツジ年の執事は手術の必需品だ』という言葉もある。〔下巻 194③〕

数詞表現 「一人一人」と「一人ひとり」の両用表記

○事件後まもなく、それは私が個人的にそれとなく一人一人に確かめてみました。〔上巻 174⑨〕

○ナカタが猫さんの一人ひとりを覚えるために、適当につけている名前なのです。〔上巻 130④〕

○私たちはみんな一人ひとり、ここに自分を溶けこませいるということ。そうしているかぎり、なにも問題は起きないのよ。〔下巻 374①〕

○「つまり彼女の顔や姿はあなたにとって、一日いちにちそのたびにとくべつであり、貴重なものなのね」〔下巻 69⑧〕

○彼女の顔や姿は僕にとって、一日いちにちそのたびにとくべつであり、貴重なものなのだ。〔下巻 72⑤〕

数詞表現 「ひとつひとつ」

- 発音が不明瞭で、ひとつひとつの言葉の意味がつかめない。「上巻⑮」
- 車のライトが樹木の太い幹を、ひとつひとつなめるように照らして行く。「上巻⑮」
- 細字のサインペンを使って、僕の身に起こったことを、小さな字でひとつひとつノートに書き記す。「上巻⑰」
- 星はひとつひとつちがった光りかたをしている。「上巻⑲」
- そこにあるひとつひとつの言葉が僕の心に居場所をみつけて収まっていく。それは不思議な感覚だ。「上巻⑳」
- 館内の床に掃除機をかけ、窓ガラスを拭き、洗面所をきれいにし、ひとつひとつのテーブルと椅子に雑巾をかける。「下巻⑳」
- ナカタさんはなにごとかをつぶやきながら食品をひとつひとつ点検していたが、やがて卵とピーマンとバターを取り出した。「下巻㉑」
- 君はそこにいて、やってきた彼女をしつかり抱きしめ、彼女の身体の動きのひとつひとつの意味を知りたいと思う。「下巻㉒」
- すべてがつながりあい、入りまじっているのに、それでいながらひとつひとつの音ははっきり聞き分けられる。「下巻㉓」
- 彼がこのキャビンを自分の身体の延長のようにみなしていることは、そのひとつひとつの動作から感じとれた。「下巻㉔」

日本古典作品引用表現

- 〈幽体離脱〉という言葉が私の頭に浮かびました。その言葉はご存じですか？ よく日本の昔話に出てきますが、魂が肉体を一時的に離れて、千里の道のりを越えてどこか遠くに行き、そこで大事な用事をすませて、それからまた元の肉体に戻ってくるというやつです。『源氏物語』にも「生き霊」がよく出てきますが、それに近いのかもしれませんが。死んだ人の魂が肉体を出るというだけではなく、生きている人にも——思いさえ強ければということですが——それと同じことができるのです。あるいは日本には魂についてのそういう考え方が、古代から土着的に自然なものとして根付いていたのかもしれないですね。しかしそんなものを、科学的に立証することはまったく不可能です。仮説として持ち出すことだけはできません。「上巻⑰」
- 「それは〈生き霊〉と呼ばれるものだ。外国のことは知らないけれど、日本ではしばしばそういうものが文学作品に登場する。たとえば『源氏物語』の世界は生き霊で満ちている。平安時代には、少なくとも平安時代の人々の心的世界にあつては、人はある場合には生きたまま霊になって空間を移動し、その思いを果たすことができた。『源氏物語』をよんだことがある？」「上巻⑳」
- 「この図書館にもいくつかの現代語訳があるから読んでみるといい。たとえば光源氏の愛人であつた六条御息所は、正妻の葵上に対する激しい嫉妬に苛まれ、悪霊となって彼女に取り憑いた。夜な夜な葵上の寝所を襲い、ついには取り殺してしまつた。葵上は源氏の子をみごもつていて、そのニュースが六条御息所の憎しみのスイッチをオンにしたんだね。光源氏は僧侶を集め、祈禱をして悪霊を追い払おうとしたが、その怨念はあまりにも強く、それに対抗することはなにをもつても不可能だつた。しかもこの話のもつとも興味深い点は、六条御息所は自分が生き霊になつていないことになつた。しかもこの話の場所にも興味深い点がある。悪夢に苛まれて目を覚ますと、長い黒髪に覚えのない護摩の匂いが染みついてるので、彼女は自分でも知らないあいだに、空間を超えて深層意識のトンネルを

くぐって、葵上の寝所に通っていたんだ。これは『源氏物語』の中ではもつとも不気味でスリリングな場面のひとつだ。六条御息所はのちに自分が知らぬうちになした所業を知り、自らの深い業を恐れ、髪を切り出家した。怪奇なる世界というのは、つまりは我々自身がの心の闇のことだ。19世紀にフロイトやユングが出てきて、僕らの深層意識に分析の光をあてる以前には、そのふたつの闇の相関性は人々にとっていちいち考えるまでもない自明の事実であり、メタファーですらなかった。いや、もつとさかのぼれば、それは相関性ですらなかった。エジソンが電灯を発明するまでは、世界の大部分は文字通り深い漆黒の闇に包まれていた。そしてその外なる物理的な闇と、内なる魂の闇は境界線なくひとつに混じり合い、まさかqに直結していたんだ——こんな具合に」〔上巻387⑱～388⑱〕

○「それはむずかしい質問だ。僕にはうまく答えられない。ただ僕に言えるのは、そういう具体的な例は一度も目にしたことがないということだ。たとえば『雨月物語』には『菊の約』という話がある。読んだことは？」〔上巻390⑳〕

○「私にはキャラクターなんてものはない。感情もない。『我今仮に化をあらはして語るといへども、神にあらず仏にあらず、もと非情の物なれば人と異なる慮あり』」〔なんですかい、それは？〕「上田秋成の『雨月物語』の中の一節だ。どうせ読んだことはあるまい」〔下巻96㉔〕

○「今は漱石全集を読んでいます」と僕は言う。〔上巻180㉒〕